



小学校に通えなかった私が  
声優アイドルグループの  
リーダーになった話

佐藤綺乃 自叙伝

知多娘。大府・W・桃花役

おおぶ推しインフルエンサー 知多娘。2代目リーダー

この冊子を読んでくださっている皆さんへ

2016年の7月に知多娘。になってから気がつけば8年が過ぎました。2024年の8月を過ぎてまだ知多娘。を続けているなんて、当時の私は思いもしませんでした。しかも、リーダーまでやったんです。まさか！って感じです。

2016年7月の私は、知多娘。になったものの、自分が演じるキャラクターが本当に完成するのもかも不安でした。地元大府市のキャラクター、大府あかね役を射止めたくて受けたオーディションは最終の公開オーディションで同票合格。結果、私には急遽新キャラが作られることになったのですが、その新キャラの姿がなかなか見れずヤキモキする毎日でした。

そんな中でスタートした活動でしたが、私はダンスが苦手だし、自分は可愛くなくてアイドルなんて向いてないと思っていたので7期のメンバーがどんどん成長している中で一人取り残されているような気がして、早く辞めたいと何度も思いました。

性格も技術も不器用な人間なので、トークで必死になりすぎて自分が俯瞰できなくなつて暴走して・・・予定時間を大幅に過ぎてしまったのにしゃべり続けたことにより、怒った大久保さんにマイクをオフにされたこともありました。それでもオフにされたことに気がつかずしゃべり続けたんです、私。今だってアイドル声優として自信があるわけじゃありません。なんで8年経っても続けられているかも自分ではわかりません。（誰か教えて！笑）

でも、一つだけ確信していることがあります。私は知多娘。やそれを取り巻く人たちが大好きなんです。私が活動が続けている一番の原動力はそこにあります。

今回、この冊子では私が8年の活動の間に何を考えていたか、どんなことがあったかをまとめてみました。

コミケの出展をきっかけにこの文章を書いているのですが、序文を書いている今は、コミケ出展日の4日前である8月8日です。

無事お届けできるか定かではありませんが、皆さんの手に届いていることを祈りつつがんばって書いていこうと思います。

拙い文章で恐縮ですがどうぞ笑読ください。

## 第1章 知多娘。のオーディション

私は2016年7月に行われた知多娘。の7期生オーディションにチャレンジしました。当時オーディションを受けた私の気持ちは「絶対合格する!」という根拠の無い自信に満ち溢れていました。

総応募数は300名以上。知多娘。が特に人気で注目されていた時だったので、全国各地から応募があったようです。

そんな中、想い叶って私は知多娘。になることができました。

オーディションの感想を一言で言うと、「楽しかった」。緊張の瞬間はあまり無かったかも。今思えば、根拠の無い自信を持っていたことが、合格に繋がったと感じています。

私と「知多娘。」との出会いは、2016年6月。当時私は声優の専門学校に通っていて、まだ学生生活をスタートさせたばかりの頃でした。

声優としてオーディションの機会がないかとチャンスを狙っていた矢先に、当時担任の講師の方から「オーディションの説明会があります。女子生徒で興味のある人は2階の収録スタジオで説明を聞いてください」と案内がありました。

やった!オーディションの案内が来た!と喜ぶと同時に、正直なところオーディションが来たならなんでも受けようと思っていたのでどんなオーディションなのかを具体的に調べないまま収録スタジオへ駆け込みました。

収録スタジオへは、1年の女子生徒数十名と、2年の女子生徒数名がいて寿司詰め状態。ライバルが多い!と燃える気持ちで、私は3列目の端っこの方の席に座って話を聞いていたと思います。知多娘。プロデューサーの大久保さんが、説明会のため収録スタジオへやってきました。知多娘。のオーディションがあること、募集人数、具体的な活動内容、たくさん話してくださったと思うのですが、正直ちゃんと覚えていません(ごめんなさい)。でも、

社会貢献活動に近い活動内容に心が少し震えるような印象を持ったことは覚えていきます。

当時声優を募集していたキャラクターは8名。その中には、大府市のキャラクター「大府あかね」もいました。それを知った時、私は「大府で一番にならなければ、東京で活躍出来るわけがない!」という猪突猛進な気持ちが滾ってアドレナリン全開。オーディションへの本気の心が芽生えました。でも、あかねちゃんのキャラクターは、どちらかというとボクっ子。私は声質的にも高めで、分かりやすいツインテールのような萌えキャラの方が得意分野だと思っていた節があったのでできるかなという不安も少しだけありました。

でも、声優への夢を叶えるため、まずは大府市で一番を目指したい!そんな野望を胸に何度も何度も練習を繰り返しました。

7月1日。一次オーディションの日があつという間に来ました。

会場は大府市役所の会議室。ここで私の人生が決まると本気で思っていました。

大府あかねちゃん一直線だった私は、大府に実際に住んでいて感じている魅力を歌にしてPRしました。トークもしました。それが思いのほか、審査員の皆さんに刺さったようでした。プロデューサーの大久保さんを除いて(笑)当時会場で私の審査を見てくれていた2代目武豊乙姫役の牛田有香(うっしー)は、笑顔で私のことを見てくれたので「合格したな!」となぜか確信を持ってその場を後にしたのを覚えています。

一次オーディションの結果報告をもらったのは専門学校に居た時でした。電話で「選考を通過しました。最終審査は大府あかねでよろしく願います」と言われた時、心の底から嬉しくて飛び上がりました。

ちなみにやはり大久保さんの評価は高くなかったようで、大府市役所のゲスト審査員の方とうっしーがプッシュしてくれたそうです。大久保さんは昔

からうつしーの意見を面白がるどころがあり、そのおかげで合格したのかも  
しれません。ギリギリの合格だったわけですが、あの時不合格だったら私の  
人生どうなっていたんだろう。

ちなみに数年経った後になぜ私のことを評価しなかったのか聞いてみた  
ら、「面談の内容が型にはまっていて印象がなかった」とのことでした。

迎えた最終審査の7月10日。私は人生で初めて強烈な焦りに心を支配さ  
れました。同じく大府あかね役として最終審査に合格した高校生が、あまり  
にもあかねっぽかったからです。私も含めて3人があかね役の最終オーデ  
イションに通過していたのですが、二人ともリアルであかねっぽい子でした。  
これはまずい！ピンチ！そんな焦りの感情と、なんとか打開できないかと  
いう思考で頭の中でフル回転。必死でした。必死とは「必ず死ぬ」と書くわ  
けですが、正直、最終審査の内容や景色を覚えていません。大久保さんが渋  
い表情をしていたことだけなぜか覚えています。

知多娘。のオーディションの最終選考はファンの方や、地域の自治体や企  
業の皆さんで構成されたゲスト審査員の方による投票で決まります。

焦りながらも一票でも多く票をもらおうと精一杯やった結果、ライバルだ  
った高校生・潜木とうやとまさかの同票合格。同票ってどうするの！？じゃ  
んけんで決める！？とザワザワする中、新しいキャラクターをもう1人つく  
るということで2人とも合格になりました。

家に帰って、なんとか合格したよと家族に伝えた時良かったねと一言だけ  
もらいました。なんとかと伝えたのは、合格した！という嬉しさだけでは  
なく、これからどうなるんだ！？というドキドキ感があったから。そんな人  
生初の声優オーディションでした。

## 第2章 私が声優になりたかった理由

そもそも声優になりたいと思ったわけは、幼少期にさかのぼります。

私は、1998年3月17日生まれ。大府市の隣である愛知県の刈谷市で  
生まれ、物心ついた時から愛知県大府市で暮らしていて、今も愛知で暮らし  
ています。地元から離れがなくなってしまう26歳になりました。家族構成  
は、40代の母・定年間の父・最近結婚した二つ下の妹がいます。

幼少期の性格は、人見知りをしない。何にでも興味津々で誰にでも話しか  
ける性格でした。逆に誰にでも話しかけ過ぎちゃうからか、よく母を困らせ  
ていました。たとえば、石焼きイモ屋さんのトラック。私が小さい頃は、家  
の前を小さなトラックの石焼きイモ屋さんがよく通っていました。

私は、アパートの寝室の窓を開けて「すいませーん」って大きな声で呼び  
ながら、トラックに向かって手を振っちゃうみたいで。そうすると当然だけ  
ど、焼き芋屋さんは気づいてくれて我が家の前で止まり、わたしたちが来る  
のを待っていていました。

母曰く、石焼きイモってびっくりするくらいお値段が高いそうで、母は躊  
躇しちゃうんですけど、断りづらい母は買わざるをえない・・・と当時、何  
度か泣く泣く買ったというエピソードを聞いています。「今ではとっても幸  
せな思い出だよ」と母が言っていました。さおだけ屋さんの販売トラック  
を私が止めてしまった時は、どうしても洗濯竿はいらなくて平謝りして買う  
のを断ったとも話していました。

何を言いたいかと言うと、幼少期の私は怖いもの無しで人とのコミュニケ  
ーションや、自分がしたことで相手が喜んだりリアクションをくれることが  
大好きな子供だったと思います。

そんな怖いもの知らずだったはずの私がある日を境に少しずつ変化して  
いき、私の人生に影がさすようになりました。

5歳くらいの頃から。同級生や近い年齢の子達との関わり方に悩みを持つようになったんです。

同じ年くらいの子との協調性や関わり方に、年齢を重ねるにつれ深く悩むようになりました。そうなった理由はたぶん、多少なりとも世間に揉まれた経験が無かったことや、自分が甘えやすい人と過ごしやすいテリトリーだけで生活していたからかもしれません。

周りとの違いや自分のできないことに直面したとき、すぐ母や父に泣きながら助けを求めていることも多かったように思い出されます。繊細だったという言葉では片づけられない何かがありました。

そんな状態が小学校に上がってからも続いて、私は次第に不登校気味になっていきました。同学年の子たちとうまく交流ができず、よく自宅には担任の先生が家庭訪問に来ていました。

私の状態を間近でみていた母は、私を一番心配して、様々な病院に通わせてくれました。小児の心療内科の先生にかかったとき、大府市にある「あいち小児保健医療総合センター」(以下「小児医療」)を紹介してもらいました。

そして小学2年生の頃。私は小児医療で長期入院することになりました。当時はなぜ自分が入院しなければいけないのかわかりませんでした、心の病気になってしまっていたんだと思います。

何も分からないまま手続きが終わり、病室を案内され、家族と別れ、家族の車が遠ざかっていくのを病室の窓から眺めていました。すごく悲しかったです。

入院してから次の日、母が生活用品と、お守り代わりのハートのビーズクッションを渡してくれました。その1週間後、母も共和の病院で長期入院になったことを知りました。当時、理由は明確には分からなかったけれど、子供ながらに私のせいだと思ったことだけは覚えています。

それから、いつもの自宅ではなく、病院で生活をするようになり、看護

師の先生に何度泣きじゃくったかわかりません。

家に帰れない不安、家族と会えない不安、遊べないこと、母の心配をぜんぶ看護師さんにつけていました。

たまに外出の許可がおりると、父が病院まで迎えに来てくれて車で遊びに連れて行ってくれました。いっしょに妹いました。その時間だけが、私の唯一の楽しみでした。

病院生活に少し慣れた頃、小児医療に附属する養護学校に通うことになりました。そこでは、様々な病気をかかえた子供たちと会いました。心の病気・身体の病気、本当に様々な子供たちばかりでした。

ある日ふと「この子達のためにできることは私にあるかな?」と思い立ち、そこから同学年の子との交流がスタートしたように思います。同じ年ですが、面倒見のいいお姉さんのような立場で、みんなと関わっていました。なぜそうだったのか、当時はわかりませんでした、客観的に見てみると、「周りの子たちが状況や症状が悪い。私は病気じゃないから、私が元気づけなきゃ」という認識だったんだと思います。病気だから入院しているわけで、自分自身を俯瞰できていなかったんだと思います。ただ、そのときはそう考えることが私が毎日生きていくモチベーションを維持するために必要なことだったのかもしれませんが。

親身になって関わってくれた看護師さん、主治医の先生、学校の友達や先生には、今もとても感謝しています。しかし、私の小さな心の変化はあれど、退院まではほど遠かったようでした。もちろん小学校にも戻れません。

1年ほど大府の小児医療で入院してから、今度は日進にある児童養護施設で長期生活することになりました。そこは、小児医療よりも比較的自由のある空間で、施設の敷地内であれば自由に遊べたりするような場所でした。

私はその場所で、小学4年生まで生活をしていました。その期間は地獄のような瞬間も多々ありました。わたし以上に心に不安を抱えていたりする子

が幅広い年齢で居て、中には不安をぶつけられるようなこともありました。心無いことを言われたり、物を壊されたり、その場所で築いた人との関係をめちやくちやにされたり、本当に色々な体験をしました。

心休まる瞬間がなく、部屋に閉じこもることも多かったように思います。そんな時、出会ったのがアニメでした。

当時18時台に放送していたテレビアニメ「銀魂」。テレビで何度も笑った笑顔にさせてもらいました。

銀魂を見て感じたのは、下ネタやギャグも多い作品だけれど、人情にあふれるシーンやセリフがとても多いんです。江戸時代の歌舞伎町を舞台に、破天荒で大胆なキャラが多いけれど日本の古き良き人情のあたたかさがあって。対人関係に多少の苦手意識を持っていたわたしにとって、銀魂の人情あふれるストーリーは教科書であり理想形でした。銀魂をきっかけに友達もできました。銀魂からいろんなアニメや漫画に興味を持ち、アニメを話題に人との関わりも増えていったので、とても感謝している作品です。大好きなアニメに出会って、そこから声優という職業があることを知りました。

人生で初めて強い憧れを感じました。

キャラクターを通して、自分の声を使って、誰かの心に届く言葉を紡ぐ声優という仕事。

私みたいな人間でも、がんばって声優になったらテレビを通じて、全国の病気で苦しむ子供たちを笑顔に出来るかもしれない。そこからわたしの夢が始まりました。

隙があればテレビに齧り付き、テレビのボリュウムを下げてキャラクターの口元を見てセリフの真似をする「アフレコ」のようなものを始めました。漫画や小説を読んで、何度もセリフの真似をしました。施設の先生にそれを見てもらって、感想を聞いたりもししていました。

銀魂という作品をきっかけに、ジャンプ作品の主人公やヒロインをいつか

やりたいという夢もうまれました。

施設の中や治療の中でどんなに辛いことがあっても、銀魂や声優への夢がわたしの背中を押し続けてくれたように思います。

長期の入院生活だったので体力が無く、持久力をつけるため施設内の卓球部にも入りました。

授業であつただひたすらに山を走る「山走り」というのも、持久力をつけるのに良いと聞いてからは積極的に参加しました。

人との付き合い方も、とても難しい環境ではありましたが、医師、看護師さん、学校の先生、病気と闘ってる友達、たくさんの人に囲まれて色んな経験を、ちょっとずつ関わることでできるようになっていきました。

小学校5年生の頃、主治医の許可が降り施設を卒園し自宅に戻りました。久しぶりの小学校に戻り、1クラス40人近くいる人の多さにびっくりしました(施設や病院の学校は多くても4人だったため)。

小学校に戻ってからは、友達づくりに苦労しました。

小学校5年の途中からわたしが転校してきた形になったので、教室では既に仲のいいグループができていました。そこに割り込む形になるのが心苦しくて、よく一人で居たことを覚えています。

3か月くらい経って、一緒に放課後に遊ぶような同級生たちができました。ただ、その子たちにはあまり自分の本音(好きな物や悩みなど)が話せず、友達とはなんだろうと疑問と不安を抱えながら小学校を卒業しました。

ちなみに勉強はからつきしで、とくに重要視もしていなかったので中学に入ってから痛い目を見ることになります(笑)

中学校1年生になって、はじめて友達ができました。銀魂をきっかけにできた友達でした。アニメや漫画が好きな子で、絵を描くのが好きな女の子。その子とよく話すようになったことで、いつの間にか周りにアニメや漫画が好きな友達がたくさんできました。

好きなことをきっかけに毎週数人でカラオケに行ったり一緒にイベントやライブに行くようなかけがえのない友達もできました。その友達は、知多娘。のライブに来てくれたこともあります。夢や目標を応援してくれる大切な友達です。

勉強もこの時にがんばりました。小学校分の遅れを取り戻すのはとーっても苦労しました。

たとえば中学校1年生のときには、九九や分数の計算が出来なくてかなりつまづきました。九九は歌で覚えて、分数はひたすらドリルを解き直しました。夏休みや冬休み、中学3年の期間はスキマ時間にずっとドリルを解き直したりする勉強をやっていました。

親も不在なことが多いので、もっぱら友達に教えてもらったり先生に聞きに行ったり。なんとか学年成績は中間くらいをキープしていたと思います。九九もできないのによく頑張ったなってそのときの自分を褒めてあげたいです。

高校受験が近づくと、志望校を選択したのですが志望校は大府高校一択で受けました。今ふりかえるとかなりギャンブル的な賭け事だと思えますが、第2第3志望校をつけずに大府高校1本で受けました。

母は父に何度も第2第3志望校を見つけると頼んだらしいですが、わたしが頑なで結局説得できなかったと後日話を聞きました。ちなみに大府高校を選んだ理由は修学旅行先が北海道だったから(笑)

高校は、部活に全力を傾けました。ずっと入って見たかった演劇部に入りましたが、先輩たちの演技力と演劇への熱量がハンパなくて1年生の頃は裏方でがんばってました。演劇は夏の大きな大会を筆頭に、冬の大会、学校での文化祭の演目などいろいろあります。

とくに夏の大会では、夏休みの全てを演劇に使っていました。朝から夜まで体育館のステージでずっと演技。ずっと話し合い。時に揉めることもあり

ましたが、それくらい先輩たちの演劇にかける本気を感じられて楽しい時間でした。

先輩が卒業したあと、わたしは演劇部の副部長になりました。先輩たちに役割を選んでいただき決めました。

先輩が卒業したあとの演劇部は、熱量を程々に継ぎがんばっていましたが、役者不足や技術不足もありなかなか苦戦しました。演者への憧れもあったものの、裏方の人手も足りないので両立してやったり、裏方に専念したりすることも多かったです。

演劇の大会をつくるという役割もやってみたくて、実行委員会に入ったこともありました。とにかく好きなものにはアクティブに動いていて、学生時代は演劇を観に行くことも何度かありました。学校に学生料金の案内が届くんです。たまに無料券もあったりするのでそれを片手に演劇部仲間と行っていました。好きな劇団に出会って、一度入団試験を受けに行ったこともあります。ズタボロでした(笑)

高校を部活に打ち込んだのは、大学を志望していなかったからです。声優になる夢を追いかけてたくて専門学校を志望していました。

でも父には、声優になる夢を伝えていませんでした。

真面目で仕事選びも慎重な父に、わたしの夢を伝えた時、何と言われるかが怖くて話したことがありますでした。

高校3年の春、意を決してはじめて父に「声優になりたい」と伝えた時、「やるなら3年は必ず頑張れよ」と言われたのを今でも覚えています。

すぐに諦めてほしくない。諦めてしまうと諦めグセがついてしまう。父の教えました。

母はこの頃退院し、わたしの夢をすごく喜び応援してくれました。母は、わたしのやりたい事が見つかってそれに全力を傾ける姿が嬉しかったみたいで、今も全力で応援してくれています。とてもありがたいことだなあとひ



しひし感じています。

父の教え、母の応援があったから、なんとか形にしたいと名古屋の声優専門学校へ通いはじめ、1ヶ月経った頃「知多娘。」と出会うことになりました。

長々と書いてしまいましたがこうしてふりかえっていると、自分の学生時代は夢に一直線でした。声優になりたいと夢を抱いたのが小学4年なので、16年夢を追いかけ続けています。夢のパワーってすごいな、なりたい想いつてすごいなとひしひし感じます。と同時に、ようやくカミングアウトできたと感じました。実は誰にも知られなかったんです。幼少期の出来事。一生墓場まで持っていていこうと思っていました。つまりきだと思っていたので、話したくなかったんです。それが今こうして書き記して人に見てもらおうまでになっていることに驚いています。

話せるようになったのは、知多娘。の活動や大久保さんの影響が強いと思っています。大久保さんは加入当初、私のことを全然評価してくれていなかったのですが（笑）加入当時、過去のことをいつい大久保さんに話してしまった時、「私は絶対この事を隠し通します。」と宣言したのを覚えています。しかし、活動の中で、小児医療などでの経験があったからこそ今の私。そう思えるようになり、今こうして文章という形で皆さんに話せるようにもなりました。時間はかかりましたが。

私の過去を知っている家族や親族からは、「こんな風に成長していることにビックリしている」といわれることがあります。

私は、家族にたくさん心配と迷惑をかけてきました。それでも一番の応援者でいてくれる家族に、負い目ではなくやりたいことを叶えている姿を見せることが恩返しだと思っています。

そして、こんな出来事を経験しなかったら出会えなかった人達もたくさんいました。この人たちが居たからこそ、今の私の夢があると思っています。

私の今の夢は、全国の病気で苦しむ子供たちに笑顔を届けることと、生き

ていたいという希望を与えられる存在になることです。それを、自分がやりたいと思った声優という職業を通して叶えられたら、すごく素敵だなと考えています。

お世話になった大府のあいち小児保健医療総合センターや児童養護施設には、いつか恩返しに行くことも私の今の夢です。

入院生活の中で、身体の病状が深刻で寝たきりの子にも会ってきました。身体が思うように動かせず車椅子でがんばる子にも会ってきました。長くは生きられないかもと言われている子にも会ってきました。

出会ったどの子も《自分はできない》と諦めていたんです。その気持ちになつてしまうこともとても理解ができましたが、私は笑顔になつてほしい！の気持ちでいっぱいでした。

何かに挑戦する姿は、きっと誰かの応援に繋がると信じて私は今も活動しています。



### 第3章 7期との葛藤の日々

知多娘。入ってから話したいと思います。

私と同期で合格した7期生は、個性と才能を持った子達の集まりでした。ダンスが得意な八木と上尾、元々芸能経験のあった咲季亜と鶴田、知多娘の中でも歴代最高の評価と言われた綾音、見た目も性格もキャラに近い潜木……。

私は声優になりたい！という夢だけを持ち、知多娘。に入りました。ダンスも歌もステージ経験も全くなかったのに。

加入した最初のリハーサルでは、他メンバーは自信をもって踊ったり歌ったりする中、私はその場で立ちすくむだけでした。

得意なことがみんなあつて、それを武器にしてがんばる同期を見ると、何も持ち合わせていない自分と比較してしまつて途端に自信を喪失しました。当時私がクルクルしている姿を見た大久保さんは「あー！この子すぐ辞めるな。」と思つたそうです。

驚いたことに、加入して半月ほどのうちに、台湾での公演の機会がありました。そこには私を含めた7期生も連れていくと、大久保さんから言われました。

はじめての海外。しかも一週間あまりの時間、何をして良いかわからない環境の中で過ごさないといけない。はじめてやる曲やダンス。やばい！と思いました。

はじめての台湾で食事でも喉を通らず、コンビニで日本のアイスを買つてそればかり食べていました。

初日の夜の練習は、緊張とプレッシャーで胸がいっぱいで倒れてしまいました。

でも、家には帰れない。知多娘。でがんばるしかない。とにかくがむしゃ

らにやるしかなくて、これでいいのかなと不安でいっぱいの台湾遠征でした。今でも後悔が残っていることが1つあります。

台湾でのステージで、大久保さんから「ソロステージやってみる？」と声をかけてもらいました。

その時私は無意識的に、「私なんて……」と否定してしまい、そのチャンスを失ってしまったんです。その時に「やりますー！」と言つた綾音と咲季亜は、泣きながらステージをやっていました。その後、最短でエースルートとして教育されるようになりました。私は1年以上の遅れをとることとなります。大事な成長のチャンスを逃してしまいました。

自信が持てなくて出た「私なんて」「無理です」は、次の機会やチャンスを奪つてしまう（しかもそれが長期にわたる）という業界の厳しさも、台湾で学ぶことになりました。遅れをとってしまったことは今でも悔しくて、後輩にも同じ思いをしてほしくないから、新しい後輩が入ってきたら必ずこのエピソードを話しています。

そんな悔しい思いもありながら、台湾という環境の中で同期のみんながそれぞれ活躍の機会を見つけていく中、何もできない私はとりあえずできることを探そうと必死でした。そんな中、私は会場ですつとチラシ配りを頑張っていました。頑張っていたというより必死（笑）。アイドル性の強い同期にも、チラシ配りだけはとにかく誰にも譲らない、負けない気持ちで頑張ろうと一生懸命でした。

今は台湾の活動が大好きな私ですが、台湾の活動では、毎回メンバー達と向き合う時間があります。

行く前は辛くて仕方なかった初めての台湾遠征でしたが、最終日に近づくにつれ、みんなで泣きながら自分の気持ちをカミングアウトするようになりました。本音で話せるようになりました。その時、気持ちを許し過ぎちゃつて、スタッフの皆さんに向かって言葉を選べず、ついつい「こいつら頭おか

しい」と暴言を吐いてしまったことは今でもチクチクとネタにされています。初めての台湾遠征は、まだキャラクターが正式に定まっていなかった中での遠征でした。

台湾から帰ってしばらくすると、潜木と私、どちらが大阪あかねを演じるかの最終審査があり、結果は潜木があかねちゃん、私が新キャラを演じる事になりました。

「新キャラかぁ・・・」とどう捉えて良いかわからず不思議な気持ちでした。それまではあかねちゃんをイメージして活動してきたわけですから、好きだった人にフラれた気分ってこんな感じなのかななんて思っていました。

それからしばらく私が演じるはずのキャラクターの全容が見えない中でもステージの活動はどんどん増えていきました。

キャラの全容はもちろん、衣装もないわけですから、他のメンバーが可愛い衣装を着ている中、私だけは「大阪市を愛してる」と書かれた黒色のTシャツ姿でステージに立っていました。そう言う「かわいそう!」とか思われる方もいるかもしれませんが、私にとっては寂しい面もありつつ、「大阪」を胸に抱いて活動するのは意気に感じるところがありました。

その期間は約1年ほどでしたが、緊張で両脚が震えていました。地域の名前をお借りして活動することは、知多娘。の最大の特徴でもあります、同時に責任感もって活動することの大切さもひしひしと感じました。

ましてや自分が生まれ育ったまちをPRしているからこそ、地域を掲げて活動する知多娘。のことを、もっと大切に、丁寧に分かってほしいと思って、この経験が返って私の地域愛と知多娘。愛を増幅させたような気がしています。そう思うようになってから先輩に話を聞いたり自分で調べたりすることが増えたように感じます。

その後、私の長い相棒になる「大阪・W・桃花」ちゃんのキャラクター設

定が少しずつ出来てきました。

「あかねちゃんの孫?」「霊長類最強の萌えキャラ?」「レスラー?」「いつも不戦勝」理解不能な用語がたくさん出てきて焦りました。もうこの頃は久保氏の脳内が恐怖でしかありませんでした。

私が桃花のイメージとして最初に考えていたのは、「とにかく元気」。勝負っ気があつてどこかいつも勝ち気。あかねちゃんの孫で大阪市で育っているので元気いっぱい。でも萌えキャラなのでかわいく。というようなイメージを全力で演技したところ、知多みるく役の Moenji さんに「人外になってるよ」(妖精とか小動物キャラっぽいという意味)と言われてしまいました。演技力に謎のプライドと自信を持っていた私の鼻はポキッと折れました(笑)

キャラクターを掴むという課題は、桃花の裏設定である「滅びの未来編」で徐々に理解出来るようになっていきました。

滅びの未来編とは、ざっくり説明すると「ある出来事がきっかけで知多みるくの心が崩壊し、知多半島が滅んでいく」という知多娘。の平行世界のストーリーです。

「滅びの未来編」では、桃花が主人公です。未来からやってきた桃花が滅びの危機迫る知多半島と知多娘。を救う設定です。「滅びの未来編」は大久保さんが私が桃花を理解するために作ってくれた物語だそうです。桃花と私を近づけてくれました。

《桃花は明るくほがらかで元気なイメージ》が、この世界では「辛い危機や困難に何度倒れても立ち向かう強い想いをもった女の子」に変わります。この設定の違いに最初は戸惑いましたが、どこか私の過去と繋がるところや、知多娘。の活動を通して感じた仲間への想い・壁を乗り越えたい想いが桃花とリンクして、演技のイメージが少しずつ固まったように感じています。

「滅びの未来編」というストーリーをきっかけに、桃花というキャラの背景がより具体的になり、何度も個人練習につきあってくださった Moenji さん

んには「演技が本当にできるようになったね」と褒めていただきました。やったー！

桃花というキャラクターを通して、歌もたくさん歌わせて頂きました。

ウェルカムウェルネスバレー、ウェルネスパラダイス、ハナモモの道で、萌えパラパラ。「滅びの未来編」のイメージソングとなる「Reincarnation」Resolution、Ragnarok、Relation。可愛いから格好いい、しっとりバラードまで幅広く歌わせて頂きました。桃花の曲は全8曲。知多娘。キャラの中でも、桃花が一番キャラクターソングがあります。

腹式呼吸など基礎的なところは演劇で培っていたので、表現力を培っていただくため練習の時間を費やしました。自分だけではレベルアップできなくて、外部の講師の先生を呼んでいただいて今も歌の特訓を続けています。

歌に関しては、知多娘。で徹底的に磨いていただいたことで自分の武器のひとつにもなりました。

どうしても不器用な分、人より時間をかけて頑張らなければいけなくて、桃花というキャラと向き合う中で挫折そうになる瞬間も何度もありました。でも、そんな時に思い出す2つの言葉があります。1つ目は、大久保さんが「桃花は君のためにできたキャラクターだよ」と声をかけてくださったこと。2つ目はキャラクターを正式に発表させていただいた2016年10月30日の「大府市産業文化まつり」。桃花というキャラクターを大府市で初めて公開した会場です。ステージを行ったあと、大府市で仕事をしているという女性から、「キャラクターに似合うステキな人になってね」と声をかけてもらいました。

どちらも身のひきしまる想いでいっぱいになる言葉で、挫折そうな時や初心を振り返るときはこの言葉を思い出しています。

桃花を演じる上で、衣装ができたこととても嬉しかったことの1つです。2017年7月1日。新しく、ピカピカで、私のサイズに合わせてつくつ

てもらった衣装でした。嬉しくて仕方ない気持ちでした。

ですが、衣装は実は作り直しをしています。一着目にできたものはサイズが要望していたものより随分と小さく私の身体に合わなかったのです。

早く衣装ができないかなと約1年心待ちにしていた分、そのショックは大きくて……自宅に戻ってこの世の終わりかと思うほどわんわん泣き散らしました。

改めて二度目に届いた時は、ピッタリ合う衣装だったのでホッとしながら皆さんにお披露目したのを覚えています。

ふりかえると私は、キャラクターができることや、衣装ができることの嬉しさを一番に噛み締めているんじゃないかと思っています。衣装があることが当たり前じゃないし、できる過程も見えていたからこそ、桃花というキャラクターとこの衣装は誰よりも自分が愛していたという思いが強いです。

キャラクターが出来る過程で、知多娘。の活動理念や先輩たちが紡いできた想いもたくさん学ぶことが出来ました。衣装の一着や、キャラクターの名前、それに声をあてる声優がどんな存在でいなければならないのかを知ることが出来て、知多娘。というグループそのものがどんどん大切になっていったと思います。

## 第4章 知多娘。のリーダーになった私

2018年8月11日。私は知多娘。の2代目リーダーに就任しました。

私には、知多娘。で尊敬する先輩がいます。3代目半田酔子役の福山晴花さんです。福山さんは知多娘。で初代リーダーを務めていて、福山さん自身より年上のメンバーも多い中、チームをしつかりまとめていました。私はそんな福山さんがつくってきた知多娘。が大好きでした。半田が大好き、知多半島が大好き。そして何より知多娘。とそこに集まるみんなが大好きな福山さん。知多娘。と知多半島と、関わる人達へ大きな愛がある人でした。

7期生は、福山さんの知多娘。イズムと一緒に活動しながら学び、継承してきた最後の後輩たちともいえます。

知多娘。で活動を始めた時、福山さんが言ってくれた言葉がありました。

「東京で活躍する先輩たちが帰ってこれる知多娘。で居続けよう。」

当時の私にはすなりと理解できる言葉ではありませんでしたが、活動を続けられ続けるほど、この言葉の意味や、そこにあるたくさんの愛みたいなものがわかってきて、今でも私の中で一番影響を受けた言葉になっています。イベントがあることが当たり前、ファンの方がいることが当たり前、そんな環境があることが当たり前。最初はそんな空間に甘えていました。時にファンが減っていく姿を目の当たりにすることがあったり、昨年まであったイベントの依頼が無くなってしまうようなことを経験した時に当たり前の考えを持った私たちじゃダメだと気付かされました。

福山さんは、2017年4月に知多娘。を卒業しました。一緒に活動できた期間は約9か月でしたが、知多娘。という環境を一番大切に思っていた福山さんのことを、メンバーだけでなくファンや関係者がみんな大好きでした。そんな先輩になりたいとわたしは強く思っていました。

卒業してからも、福山さんとはまめに食事に行くことがありました。自分はどう立ち回るべきなのか。福山さんにお時間をもらってよく相談をしていました。正直、最初は声優として躍進していくための踏み台の場所として活用しようと考えていました。だけど福山さんの考えを知れば知るほど、わたしは知多娘。が大好きになり、知多娘。を大切にしたいという想いが募りました。

そんな初代リーダーの福山さんが卒業して、1年弱はリーダーを置かない方針でチームは運営されていました。「全員がリーダー」そんな知多娘。を目指していました。しかし、福山さんは偉大でした。福山さんがいなくなってから、次第に小さなルール違反を犯したり、知多娘。としてふさわしくない考え方、発言をするメンバーがチラホラ出てきました。

そんな状況の中で、私は一人のメンバーとして尊敬する福山さんが大切にしたいと思う考えや在り方を、継いでいきたいと考えようになりました。それから見違えるようにわたしの考え方や動きが変わりました。その一つが、感謝の想いが強くなったことです。メンバーをライバル視するのではなく、切磋琢磨する関係でありたいと声掛けも変わりました。考え方もかわって、自分だけが満足というよりグループのためという価値観に変わりました。今すぐ東京に行きプロの声優になりたいという野心より、知多娘。として活躍したいという情熱に少しずつ変化しました。

そんな姿を知多娘。プロデューサーの大久保さんも見ていたのでしょう。ある時、私に「知多娘。のリーダーをやってくれないか」と声をかけてくれたんです。すぐビックリして、でも尊敬する福山さんのようにはなれないとどこかで思ってしまった、自信が無くて断ろうと思ってしまいました。

その時あの「台湾」を思い出しました。ソロステージを躊躇して成長と活躍の機会を失って悔しい思いをしたあの時を。

そんな私の考えを見越してなのかは分かりませんが、大久保さんは「グル

ープのためにではなく、君の成長の場としてリーダーを使って欲しい」と重ねて伝えてくれました。雷に打たれたような衝撃でした。歴史あるグループのリーダーを、グループ全体を良くするためにではなく私の成長のために使ってみてほしいと委ねてくれたのです。プロデューサーがそんなことする！？と再度ビックリすると共に、その言葉をかけてもらって安心感が芽生えました。リーダーという大切な役割を私の勉強材料として用意してくださいの想いに応えたいと思いました。

初めての台湾で掴みきれなかったチャンスを取り戻す機会があると思いました。ただし、ここしかない。「やります」と答えました。

ただ、その時の私は、実は東京でとある事務所の養成所に通っていました。専門学校で東京のオーディションを受けて、東京でやっていけるかのチャレンジをしている最中だったんです。

そんな中持ちかけられたリーダーの話だったので、そこも踏まえて改めて大久保さんに本当に私でいいんですか？と聞いたら、それも折り込み済みという返答が帰ってきました。「むしろ東京で活躍出来るようになるための勉強にリーダーの経験を使っていよいよ」と。

「みんなに自由にやってもらいたかったから、主体性に任せてみたけど、残念ながら今の知多娘。は自由と勝手を間違えてるメンバーが多い気がする。君のあり方、考え方を知多娘。の基軸にしてくれていい。」そこまで言うてくれました。信頼してくれたこと、見てくれていたことが本当に嬉しかったです。

大久保さんは優しいけど厳しいです。当初は綾音や咲季亜ばかり評価していて、私なんて見てくれていない・・・私はこの男に利用されているだけじゃないか（笑）と思ったこともありました。

しかし、後日知ったことですが台湾で、私がコミュニケーションが苦手な八木の横で一生懸命チラシを配っている姿を見て、その時から将来リーダー

になるかもしれないって思っていてくれていたようです。

私はただ楽しんでいただけなのですが、大久保さんは私が八木によりそってくれていると勘違いして感謝してくれていたようでした。

リーダーになることが決まってからは福山さんや大久保さんに相談の毎日でした。実は私はリーダー経験がありません。むしろ私自身リーダーとか人の前に立つようなイメージは持っていないくて、苦手にしていた立場でした。リーダーになってどうしたら良いかまったくわかりませんでした。

なのでリーダーとしての心構えや関わり方は福山さんを参考にしながら、大久保さんとその都度、知多娘。のメンバーの状況に合わせて構成していきしました。

メンバーへは、リーダー就任式の約6か月前に新リーダーになることを伝えました。福山さんのような完璧なリーダーになりたいけれど、リーダー経験の無いわたしはみんなの力を借りることになりながらリーダーをやることになると思うから力を貸してほしい。そんな風にみんなに伝えたら、メンバーから拍手があがりました。

がんばろうって改めて思いました。

## 第5章 リーダーとしての奮闘の日々

私がリーダーを務めたのは2024年の6月までの約6年間でした。その間の知多娘。は、波乱万丈。様々な困難がありました。

その一つが、マスコミで一方的な悪意のあるニュースが流され、その影響で知多娘。が活動できなくなるかもという危機があったときのことです。村八分とはよく言ったもので、地域で知多娘。が知多半島から蚊帳の外にされそうになったり、実際にそうなってしまったこともあって、当時それに真っ向直面していた大久保さんやスタッフの方々はかなり疲弊していました。

私は、そんな現状をなんとかしたいと信頼できる同期の加藤綾音と話しました。行き着いた結論は「これはチャンス！」でした。落ち込んだ大久保さんに「迷惑かけてごめん」と謝られた時、「むしろ知多娘。を広めるチャンスですよ！がんばりましょうよ。」って加藤と内海お吉役の樋口晴名と素直に伝えたら、大久保さんは鳩が豆鉄砲食らったような顔をしていました。今思い返せば、大変な時期でしたが、そんな中でも信頼してくれる地域の方や自治体の方、関わるスタッフさんやメンバーの思いの強さもあって、あの経験が知多娘。を強くしたように思っています。

2019年には新型コロナウイルスが全世界に蔓延し、イベントが一切無くなる出来事もありました。毎週のようにあったイベントが、中止。先々決まっていたイベントも次々に中止が発表され、メンバーと長い期間、会えない時期もありました。予定の詰まったカレンダーは、ほとんど真っ白になってしまいましたがの私も挫折そうになりました。イベントをやろうとすればコロナ対策に負担がかかるだけではなく、誹謗や悪意のある嫌がらせをされることもありました。色々な意見が錯綜した時期なので致し方ない所もあったかもしれませんが、ファンの方から不満が出ることもありました。

知多娘。は福山さんの「100年続く知多娘。」という言葉がスローガン

であり、それは私や関わる全ての人が大切にしている言葉になります。

私も続けるために無い脳みそを絞り出しました。なんとかPRできる方法はないかとオンラインでの活動に移行し動画を更新したり、単独ライブを毎月行うようになるなど私たちは活動を継続しました。今思えば、よく続いていったなと思っています。一つコロナが出たら戦犯のように袋だたきになったり、マスコミやネットでやり玉にされてしまう状況でしたから。こんな時、知多娘。が知名度があるグループであることの大変さを身にしみて感じました。

そんなコロナと戦っている最中、もう一つ私を苦しめたことは、信頼しているメンバーの卒業と、新しいメンバーたちとの出会いです。

同世代の樋口や牛田、加藤が卒業していく時は本当に辛かったです。私一人取り残されていくようで不安で仕方ありませんでした。私も辞めようかな・・・そんな考えが頭をよぎったこともあります。

そのタイミングで知多娘。の採用方針が中学生を積極的に採用していく方針に変わったので、どうしていいかわかりませんでした。

私は妹はいるのですが、私の妹は私よりしっかり者なので正直年下の子との関わり方がよくわかりませんでした。

それまでは18歳以上のメンバーが多かったので、声優になることが「目標」でした。しかし、中学生くらいのメンバーになると「目標」というより「夢」が多いんです。思春期の不安定な時期でもあり、そんな彼女たちから甘えられたときに、厳しくした方が良いのか優しくした方が良いのか本当に悩みました。

当時、加藤や牛田が辞めて、角谷や田畑が中心メンバーになったことも不安でした（笑）何度泣き言を言ったか・・・大久保さんに「辞めてやるー」と叫んだかわかりません。

後になってわかったのですが、リーダーシップって「俺についてこい！」っていう形だけじゃなくて、角谷や田畑のように、一人一人と寄り添いながらゆっくりと見守っていくことも大切なんだということを二人に教えられた気がします。

いつも下ネタやゲスネタをいいながらも、お菓子を買ってきたりして盛り上げてくれる角谷。くるくる自分のことでも手一杯なのに、優しくして後輩と長時間の電話にも付き合う田畑。そして、不器用ないわゆる昭和気質なリーダーの私。3人とも知多娘。という環境が大好きだから、上手く行っていないように、ものすごく上手くチームワークが出来ていったように思います。3人で福山さん一人の役割をなんとか果たしていました。

後輩達には、ダンスや歌を始めとして、社会のルールや言葉遣いだけではなく、スマホやSNSの使い方や、コンテンツとの向き合い方や部屋の整理の仕方まで様々なことを指導しました。指導するために自分もしっかりと出来ないといけないので、それも大変でした。明け方までメンバーの保護者の方や大久保さんたちと話し合ったこともあります。

心の精細なメンバーも多いので、毎日が勉強の日々でした。

何年か経ち、ビックリするのは、今の知多娘。は中学生のメンバーまでみんなしっかりと知多娘。のことを考えています。

いつも自分たちの改善点をいち早く議題に挙げ、変えようとしてくれるのは、久野、美穂、木村を始めとして円楓に恋楓を加えたいわゆる14の民の5人です。姫可は、田畑のように若いメンバーに寄り添ってくれるし、ゆきほは模範的なアイドルとして知多娘。を引っ張ってくれています。もちろんは天然だけど私のことを尊敬してくれていて、大久保さんから「顔も発言も佐藤にそっくり」と言われるようになってくれています。頼れるエースです。

ひなたはいつも周りを楽しい話題で盛り上げてくれるし、尾花とかなほと

風音は甘えん坊だけど知多娘。が大好きですごく大切にしてくれています。七緒は良いところもダメなところも私にそっくりだから、個人的に楽しみなメンバーです。知多娘。を心の底から大切に思っている角谷。15期の高畑、吉田も本当に明るくて積極的です。まだ新人とは思えないくらい知多娘。に馴染んでくれて前向きです。ファームのみんなも知多娘。のために小さな事からがんばってくれています。そして下前。彼女の成長が私に次のステージへのチャレンジを決意させくれました。

気がついたら知多娘。は、福山さんが辞めた時に描いたけど叶わなかった「全員がリーダー」のチームになりました。



## 第6章 私のこれから

リーダーをやっている思わず足を止めそうになる瞬間が何度もありましたが、みんなの協力あって、私はリーダーを6年務めることができました。そして、その座を下前真凜が引き継いでくれました。私は下前が「リーダーをやりたい」と言ってくれたことでリーダーを引き継ぐ決意をしました。福山さんが辞めた後、混乱があったことを覚えているので、私は、私が知多娘。である間に、リーダーの座を引き継ぎたいと思っていました。

まさかあの下前がそう言うってくれとは思いませんでした。本当に嬉しかったです。だって下前は一番手がかかった後輩ですから（笑）中学生の頃からずっと知多娘。にいてくれて、甘えん坊で時に間違えちゃうんだけど、知多娘。を大事にしてくれる。彼女も私に負けず劣らずリーダーらしく思われない（笑）メンバーなので、本当にビックリしました。

そんな下前がリーダーをやりたいと言ってくれたことは、私が知多娘。をやっている一番驚いたことであり嬉しいことでした。

私は、リーダーを辞めるときは、リーダーになりたいと言ってくれる子に引き継ぐと思うていたので、彼女に引き継ぐと決心しました。反対も多かったですが、リーダーになりたいと言ってから日々成長している彼女や、そんな姉を見て姉に負けまいと、がんばっている真凜の妹の美穂を見ていると、絶対大丈夫だと思います。知多娘。の未来は明るい。そう確信しています。

私は、みんなには完璧な姿ではなく、ダメダメな姿も失敗して怒られる姿もたくさん見せてきました。それでもがんばってこれたのは、単純にみんなと頑張ることが楽しかったし、ダメダメなわたしを支えてくれる人達が大勢居ってくれたからだと思っています。

わたしは、知多娘。で模範となる知多娘。になりたいと思いました。知多

娘。が大事だからこそ、わたしがその魅力を伝えるトップバッターでありたいと活動してきました。

でも、私ひとりではできなかったとの年間をふりかえってしみじみ感じます。「みんなで作る知多娘。」を、これからの知多娘。にも大事にしていってほしいと心から思います。

8年活動してきて、本当に沢山の経験を知多娘。で積むことができました。加入したころ18歳だったわたしは、今26歳です。知多娘。に私は青春を捧げてきたと言っても過言ではありません。

つい2か月前に2代目リーダーをバトンタッチして、今わたしは新たなチャレンジをしています。

自分がやってみたいオーディションを受けたり、知多娘。ではリーダーとしての立ち回りを徹底してきたので今は個人の魅力をより研究するようになったりと、知多娘。としても個人としても挑戦する気持ちを持ちながら活動しています。

知多娘。に出会っていないければ。知多娘。オーディションをチャレンジしていなければ。合格していなかったら。いろんなたればを思い浮かべる必要がありますが、きっと今の自分以上に魅力的な自分になれていなかったと思います。

どれも自分で選んで、挑戦して、やってきたことだから。わたしは不器用なので本当にちよつとずつでしたが、自信を持てる場所が増えていきました。

その自信を武器に、外の世界にいる人達とどれだけ戦っていけるかを今私はチャレンジしています。

チャレンジしなければ何かを得ることもできないと、知多娘。でもたくさん教わったからこそ、チャレンジする気持ちを忘れず、そしてそれを伝えてみんなにパワーを与えられる存在になりたいと今は考えています。

もともとこういったいろんな景色が見たいと思っています。そんな矢先にコミケ出展という機会が巡ってきました。チャンスだと思ってコミケ開催ギリギリながらも必死に書いてます。考えてみたらいつも私、必死ですね。(笑)

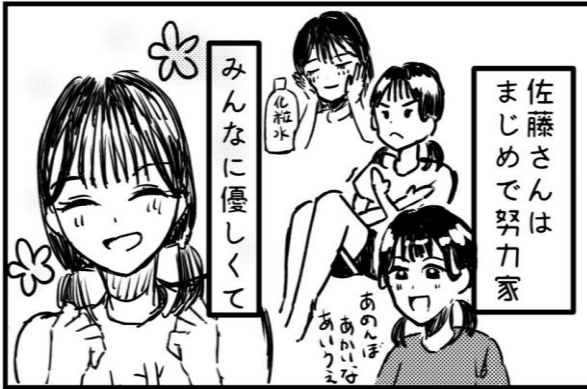
この冊子を手に取ってくれたあなたが、ちょっとしたでも知多娘。のことに興味を持ってもらえたり、私のことを知ってもらえたり、好きになってもらえたり、知多娘。のライブに来てくれたら天にも登るような気持ちです。

この冊子を読んでくださって何か一つでも、皆さんにとっての勇気や参考も反面教師になったら幸いです。

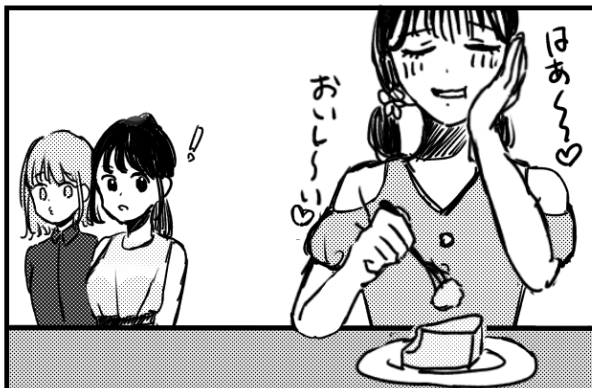
これからも「誰かのために」や「喜んでもらう」は勿論大切に、自分の夢を叶えることも諦めずがんばり続けたいので勇気がほしいときは、ぜひわたしに会いに来てください。その時、読んでくださったあなたに必要なパワーを与えられる存在であるよう、これからも精進します！

最後まで読んでくださって本当にありがとうございます。これからもよろしくお願いします！

みんな大好き佐藤さん!



# 佐藤さんの好きなもの



△誇張しています。あくまで「エンタメ」として温かい目で見てください。

# 警備員さんと佐藤さん

IN 台湾

